

書体を気にせずにはいられない

文字は生き物だから面白い

音を聴けば音階がわかる「絶対音感」になぞらえて、文字を見れば、その書体の名前がわかるという「絶対フォント感」。この技能の持ち主である須藤雄生さんに、書体の知られざる世界とその魅力について聞いた。

筑波大学附属駒場中・高等学校数学科教諭

須藤雄生

●すどう・ゆう 1979年神奈川県生まれ。東京学芸大学卒業。2012年より母校の筑波大学附属駒場中・高等学校で数学を教える。目にした文字の微妙な違いを感じて書体を言い当てる「絶対フォント感」の持ち主。

やる気の出る書体、出ない書体

——書体に興味を持つようになったきっかけは何でしょう。

小学校へ入学して、教科書や先生の黒板の板書など、あらゆる文字を目にする機会が増えてからです。

教科書や書籍の本文などに使われる「教科書体」という明朝系の書体

があり、小学校低学年のときに国語と算数の教科書の文字の違いが気になりました。「同じ文字でも、教科書によってなぜ文字の形が違うんだろう？」と不思議に思ったんです。

国語と算数では、平仮名の「あ」のカーブの丸みが違っていました。国語の教科書の「あ」はカーブが角張っていて、算数の教科書の「あ」のほうが丸い。

（ジ参照）。「学校では教科書体の点の打ち方を習うけれど、世の中にあふれている明朝の書体では点の位置が違う。明朝のほうがカッコいい！」と、明朝の点の打ち方をマネしてテストの答案を書いていました。おそらく先生はそれを見てあまりいい顔

をしなかったんじゃないかなあ。書体の違いは漢字よりも平仮名のほうがわかりやすく、たとえば「ふ」などは書体による違いがわかりやすいと思いますよ。

高学年になると、中学受験の勉強が始まりました。しかし、問題集や



同じ文字でも書体によって点の位置、トメハネの詳細が異なる

参考書を買っても、内容より書体のほうが気になって……。 「こっちの書体のほうが好きだから、この問題集を解くか」と、やる気の基準が書体になってしまう。好みの書体は、色のない、クセのない書体でしょうか。主張のある書体や個性の強い書体は、題字や見出しなど、アク

セントとして使うぶんにはいいと思います。教科書の本文や問題文には向かないんじゃないでしょうか。読んで違和感があると、内容がアタマに入らない。

私は文字を読むよりも「書く」のが好きでした。作文だと内容を考えなければならぬので、文章を書くというより、ただ単純に「文字を書く」行為が楽しかったのだと思います。だから授業でノートをとることも好き。残念なことに、ノートのきれいさと成績のよさは必ずしも比例しなかったですが。

——「絶対フォント感」という言葉は造語だそうですね。須藤さんは文字を見ればその書体の名前がわかり、その種類は三千にも及ぶのだとか。大多数の人は文字で書かれている内容に注意を払うのでしょうか、私は文字の形や作りなど、書体に目が